

# 「私」を書くことに関する一試論～『箱男』と『何者』から

加藤 奈奈子

(奈良女子大学研究院生活環境科学系臨床心理学領域)

要約：SNSは、現代急速に利用者を拡大しておりそれに伴い、コミュニケーションの形態も変質してきているように思われる。朝井リョウ著『何者』は、Twitterというツールで登場人物を語らせる構成の作品であるが、そこに見える観察者として眩く主人公の在り様に着目した。その際、安部公房著の『箱男』の他者視線を避け匿名性によって「私」を手放した箱男が、「私」を記録することによって自身を解体していくあり方と重ね、現代においては、断片的な「私」があふれてしまうことや箱の内側を作っていく難しさについて論じた。

キーワード：SNS, 観察, 自己意識, 書くこと

## はじめに

朝井リョウにより執筆され、2012年に発刊された『何者』は、第148回直木賞受賞作であり、2016年に映画化された作品である。就職活動中の大学生それぞれの在り様を描きながら、登場人物をTwitterで語らせるという形式で構成されている。話題となった背景には、本作品のモチーフが、就職活動という意思決定を突きつけ、これまでの自身のあり方を省察させるという大学生にとって多大な心理的な負荷が推測される出来事の内的な側面を、極めて現代的なツールであるTwitterを用いて表現しているということにもあると考えられる。インターネットとスマートフォンの普及により、誰もが手軽に発信し、即座に世界と繋がれる。本論では、こうした現代のあり方を、「私」の表現として発信することの諸側面として、小説『何者』と『箱男』から迫ってみたい。

## SNSの時代

SNS(ソーシャルネットワーキングサービス)は、LINE, Twitter, Facebook, Instagram, Google+, Skype, mixiなど様々な形態をとるもので、「不特定多数のネットユーザー間の交流を促進する商用サービス」(ICT総研, 2016)としてネット上で人と人とを結びつけるサー

ビス全般を指す。日本国内におけるSNSの利用者も年々増加しており、ICT総研の2016年度SNS利用動向に関する調査では、2016年末までに国内ネットユーザーの69.3%がSNS利用者であると推定された。ただし、SNSの種類によってそれを利用するユーザーの思いは異なっていると推測され、「不特定」の他者との繋がり方、自己開示のあり方をSNS特有のものとして、一概にまとめて論じることはできない。また、ネットユーザーにおける利用率として調査対象者を限定していることを考えると、SNSにまつわる全ての事象を現代社会の特徴と示すことができないだろう。しかし、総務省平成27年版情報通信白書によると、過去1年間の利用経験は、LINE<sup>i)</sup>は37.5%、Facebookは35.3%、Twitterは23.5%という結果が得られており、またここ数年でアクティブユーザー数の増加を捉えるならば、SNSの浸透に伴い、コミュニケーション形態が変質しているであろうことが伺える。

さて、SNSは様々な形で関係性を可視化するしくみを有している。例えば、Facebookや

i) LINEは、メッセージアプリとして、特定の人の繋がりに重きをおいているが、総務省のカテゴリに従い、SNSの中に位置づけている。

Twitterのフォローやフォロワーは、情報を共有する人を可視化することになる。またLINEの既読機能も、相手がメッセージを受け取ったことを知らせるという従来、メッセージを発信した人が見えなかったものを可視化するしくみである。加藤(2016)は、女子大学生に対する調査からLINEの既読表示は、「受信者がスマートフォンを操作できる状況であることを送信者に伝え、送信者が早い返信を求める理由になり、早い返信を求められているという受信者のプレッシャーになっている」と分析しており、既読の機能が送信者や受信者の関係を動かすような要因になりうるということが伺える。『何者』の世界では、こうしたSNSが登場人物とともに付される。このことがどのようなことを意味しているだろうか。

### 『何者』のディテール

『何者』では、小説本文がはじまる前に登場する人物のTwitterのプロフィール画面が記されている。それはプロフィールを描くことによって次のページから始まる物語の登場人物たち、そのアカウントを運営し読む主体である“中の人<sup>ii)</sup>”のキャラクターを提示している。例えば、登場人物の一人である“理香”のプロフィールには、留学経験や国際的なボランティアやプロジェクトへの参加、大学企画の運営など華やかな経歴が並ぶ。その書き方が理香の積極的なあり方を思わせると同時に理香が自分をどのように世間に見せているのかという“見せる自分”の表現にもなりうる。このような理香のあり方を内心笑う主人公の拓人は、理香に物語の最後にこう突きつけられる。

そうやってずっと逃げてれば？カッコ悪い自分と距離を置いた場所で、いつまでも観察者でいれば？いつまでもその痛々しいアカウント名通り【何者】かになった振りでもして、誰かのことを笑ってなよ。就活三年目、四年目になっても、ずっと。(p.318)

拓人が、人に教えていない裏アカウント【何者】を使って、ずっと他者を分析していたことが明るみになる。拓人自身が自分の名前で表現できなかったことを知らしめると同時に、観察者という形<sup>iii)</sup>でしか(それは“キャラ”づけし、観察者であった読者自身にも突きつける言葉でもあるのだが)本心を語れないあり方を浮かびあがらせている。

観察者という側面から鑑みると、拓人の観察者としてのあり方は、観察者がいつでも外側にいて、観察対象となる当事者とはなり得ていないことが伺われる。サリヴァンは、「関与しながらの観察」と述べ、セラピストの態度を示した。「関与しながらの観察」において、セラピストは、「在ること」と「為すこと」の緊密に絡み合うところで進められる関与観察(斎藤, 1992)であるとされ、そこでは、関与者たる臨床家の視点が付随し、自身の行動も分析の対象になる。しかしながら、こうした観察のあり方とは異なり、『何者』で見出しうる匿名で表現された分析には、紐づけされるべき「私」が欠けている。「自分と距離を置いた場所で」語られるその語りには、「私」はいつまでも分析対象とならず、徹底的に安全なところに居続けている。先述した総務省の調査においても、Twitterの利用者のうち76.5%が匿名で投稿していることから、発信する情報と「私」との結びつきの弱さを伺い知ることができるだろう。

一方、臨床場面においても、クライアント自らが自分の調子を語る折に、「らしい」や「みたい」など推測や伝聞で使用されるような助動詞がつけられるとき、クライアントの持つ「私」意識の欠如、当事者意識の欠如について考えさせられることがある。このような事象を考えると、「私」と距離がある語りには、自意識のなさや他者視線の取入れなどといった形でクライアントの主体の在り様を示すサインになるときもある。このような距離のある「私」のあり

ii) 中の中は、もともとは着ぐるみの中に居る人を指す言葉であったが、声優やアカウントの管理者も指すようになっている。

iii) 『何者』のアナザーストーリーとして発表された『何様』では、この観察者としてのあり方をテレビの副音声になぞらえて効果的に表している。

方について次項では『箱男』を題材に考えてみることにする。

### 『箱男』にみる観察者

『箱男』は安部公房が1973年に発表した小説で、本文と8枚の写真と1枚のネガの写真、本文とは別に挿入される新聞記事のような短い文章によって構成されている。章によって「箱男」の位置が入れ替わるような記述や挿入的な章、書いているものと書かれているものとの反転など一筋の物語としては読みがたく難解な小説である。箱男は、その名の通り、自分の身体を覆うように箱をすっぽり被っている。この箱の製法において、「もっとも慎重を要するのは「覗き窓」の加工である」という。こちら側から覗けるがビニールによって外側からの視線を避けられるような仕組みになっている。この「覗き」について、片野（2015）は、移動する小さなパノプティコン<sup>iv)</sup>となることで覗くことの権力を手に入れる代わりに匿名化し、「箱をかぶって、ほく自身でさえなくなった、贗のほく」という不確かなものへ変わる恐怖を背負うことになると指摘する。箱を被ることで自らの身体を他者の視線から隠す箱男は、パノプティコンにおいて囚人に見られていると思いこませるといふ囚人側の主体形成に第一義をおいたものであり、匿名化していることによって、不確かさを有するというのである。「鳥や魚に似てきた」という記述では、箱男が匿名化され、自分自身である「私」とは距離がある視点になったことを示している。その後に続く、遊園地の風景も俯瞰的な視点で描かれている。河合（2004）は、建築家藤森照信の言葉を借りて臨床家にとって「地べたコンシャス」であり、地べたに根を下ろしてここに居ることが大事であると述べている。俯瞰の視点は、「居る」という意識を前提としておらず、他者視線と自己視線を放棄したあり方であり、いかに、地の足のついていない不確かなものであるかをうかがい知ることができるだろう。

ところで、箱男はいかにして箱男になったの

だろうか。この点について、『箱男』の中では、

「見ることから、見られることから、ただ逃げ出したかった」<sup>1)</sup> ほか、「すすんで近視眼になり、ストリップ小屋に通いつめ、写真家に弟子入りし、」自然な流れの中で箱男になったと語られる。見ることと見られることの放棄のために覗く側になりたいという欲求がうかがえる。また挿入的に示される〈Dの場合〉では、少年Dが強さへの憧れを背景にアングロスコープを使って、「覗き見」をする場面が描かれる。他者視線のない世界と「想像の中で平和条約に調印する」のである。これら「覗き見」の動機は、いずれも「見る－見られる」という連関図式の外に出ることとそうすることによる安心感であるように思われる。それは、匿名化によって「私」を放棄することであり、他者に投げ込むという形で自らの立ち位置を規定しているようでもある。『箱男』の中でも、贗箱男と贗箱男と通じている若い女性が現れ、5万円で箱を譲ってほしいと願いでる。箱男の箱自体が持つ力が、認められたことではあるのだが、この物理的に箱を放棄するという時にいたりはじめて、ほくは、箱男が自分であったことを証明するべく、「安全策」として記録を書くことになる。箱自体を放棄したときに匿名化した「私」が「真の箱男」として、それを書くことによってとどめようとするのである。

### 『箱男』にみる記録

第1章である〈ほくの場合〉では次のように書かれている。

これは箱男についての記録である。

ほくはいま、この記録を箱の中で書き始めている。頭からすっぽり、ちょうど腰の辺まで届く段ボールの箱の中だ。

つまり、今のところ、箱男はこのほく自身だということでもある。箱男が、箱の中で箱男の記録をつけているというわけだ。(p.7)

箱男は、箱にいながら箱の中で“記録する”存在である。小説自体が、箱男の記録する記録として位置づけられるとき、僕と贗箱男の間で、書くことによって贗箱男を自分の書くものの登場人物にするという「書く－書かれる」の連関

iv) 全展望監視システム

の中に入ることになる。片野（2015）は、書くことが、書かれた時点で、誰かによって記述され、監視されている可能性を常に孕んでいると説く。そこで見出されるのは、「真の記述者の決定不能性」（片野、2015）であるという。ここにいたって、「書く―書かれる」「見る―見られる」両者の連関の根源たる「私」に繋がれることのないまま、主体が引き裂かれている。

それでは、どうして書くことはこのように主体が絡む形式をとるのであるのか。書くの語源をひもとくと、“搔く”と同源であることから、引っ搔くというような“切る”側面と繋ぎ止めて組み合わせるといった“つなぐ”側面を有している。切りながら繋ぎ止めるという書く作業は、主体の内的な作業として両極的な性質を有するもの（加藤、2005）である。また、心理臨床場面における書くことの中には、「クライアント―セラピスト間」の面接記録を書く行為が挙げられる。面接の終了後に振り返りながら書く記録には、時間的にも空間的にも隔たりがある。実際の面接という“現実”と書いている場との隔たりは、真に起きていることから少しずれ、書いている「私」の現実が反映されたものである。片野（2015）は、『箱男』に見出せる「書く自己」と「書かれる自己」の時間的遅れに注目し、このズレにパノプティコンの監視に抵抗する可能性が内包していると指摘した。また、時間について木村（2005）は、「アクチュアリティとしての時間をもっとも発揮されるのは、空間的な広がりをもたない「いま」の瞬間においてである」と示し、「いま」に凝縮されている時間は「私」の別名であることを論じている。このように考えると、「書く自己」と「書かれる自己」に見出される時間差は、「いま」＝「私」の断片化として捉えることもできるのではないだろうか。

#### 『箱男』から『何者』へ

最終章、ほくは、

箱から出るかわりに、世界を箱の中に閉じ込めてやる。いまこそ世界が目を閉じてしまうべきなのだ。（p.209）

と記録する。世界と「私」との内包関係を反

転させ、「私」を包む箱を肥大させようと試みているようである。さらに、箱に余白があることの重要性を記録する。河合（2013）は、従来の自己省察ベースのカウンセリングが適用できず、切れ目のない話を続けるクライアントとセラピストの間の「第3のもの」としての隙間や沈黙に着目しているが、見出された余白の重要性をクライアントの在り様と合わせて考えると興味深い。切れ目のない話には、箱男の近視眼という、対象との距離がないあり方が見出されることを考えると、箱男の「私」に繋がれない匿名性は、「反省する自分」と「反省される自分」という近代意識での「解離」を生み出す「自己意識」（田中、2013）ではそもそも説明できないものなのではないだろうか。それは、ただ断片化され、外在化された「私」にほかならない。田中（2013）は、「現代の意識」を、「水平的・一次元的に世界に満ちあふれる、情報として外在化・偏在化した＜私＞の意識」として「ユビキタスな自己意識」と示している。箱男の観察する「覗き見」からはじまる匿名性という形での「私」の放棄と、書くことによる「私」の断片化は、世界に断片的な情報として外在化・偏在化するべく箱を肥大させることであるのではないだろうか。

『何者』の主人公拓人は、「何者」として匿名性が担保された中で、他人の分析をつぶやいていた。それが理香によって、「何者」がほかならぬ「私」に紐づけられたことで就職浪人している「私」に向きあうことになる。理香という外側の力によって、箱を脱ぐことができたといえる。これは、『箱男』の記録の中に「赤インクの欄外の「註」として記される自己省察するような視点ともリンクしている。箱男が別の視点から見られること、内側では省察できなかったことが、他者の存在によって為しえたことであっただろう。

このように考えていくと、他者の視線を避け、箱を被っている人に寄り添っていくことについてのヒントが浮かび上がるようである。それは、余白であれ、「私」の箱の記録であれ、箱の内側を作っていくという作業ではないだろうか。心理臨床の場において考えるならば、内と外、



両者を見つめながら、クライアントが自身に紐づけされた形で語れるような箱をセラピストがどう維持し、内側を作っていく作業を共にできるのかということであるように思われる。

### さいごに

ここ最近、SNSに分類されるものの中で利用者が急激に増加しているのが、Instagramである。Instagram Press (2016) は、利用者が6億人を超えたこと、そのうち1億人は最近6か月のうちに増えたことを発表した。2010年に登場したアプリであることを考えると、急速に利用者を拡大していることが伺える。このアプリの語源は、Instant (瞬間) と Telegram (電信) から成る造語であり、瞬間のできごとを撮影し、簡単にネットにアップするというコンセプト (坂田, 2016) で撮影した写真やビデオを共有するといった最小限の機能から成り立つ。このInstagramの特徴は、文字ではなく、写真という、より瞬間的、視覚的に切り取られた情報を発信するということである。シャッターを押すという脊髓反射のように即座に切り取られた「私」はより断片化し、視覚的な「私」の情報として氾濫していくのだろう。また、Twitterなどでユーザーが使用し始めたもので、Instagramでも同様に活用されているハッシュタグは、シャープ (#) 記号の後に文字情報をつけることによって検索しやすくなるものであり、写真をグループ化するというものであるが、そのタグ自体のつけた方も写真を説明するだけでなく、「#写真好きな人と繋がりたい」など、写真を介して自分をグループの中に位置づけようとするあり方も伺え、「私」を位置づける箱を探しているようで興味深い。畑中 (2013) は、現代が自分に主体のないシステムになじみ、「一個の自己として一貫性を持って生きるという絶えざる要求から解放されつつある」と論じながらも、自己の増殖や解体を他人事として傍観することはできないと警鐘をならしている。今後のSNSの動向に注視しつつも、表面的な動向に惑わされず、そこで見出せる心性にも目を向ける必要があるように思われる。

### 引用文献

- 安部公房 (1973). 箱男. 新潮社<sup>v)</sup> (新潮文庫).  
 朝井リョウ (2012). 何者. 新潮社<sup>vi)</sup> (新潮文庫)  
 朝井リョウ (2016). 何様. 新潮社.  
 畑中千紘 (2013). 発達障害の時代における自己の現況と変遷——ミクシィからフェイスブックへ. 河合俊雄・田中康裕 (編著). 大人の発達障害の見立てと心理療法. 創元社, pp.218-234.  
 ICT総研 (2016). 2016年度SNS利用動向に関する調査.  
<http://ictr.co.jp/report/20160816.html>  
 (2017年2月11日閲覧).  
 Instagram Press (2016.12.15). 600 Million and Counting.  
<http://blog.instagram.com/post/154506585127/161215-600million>  
 (2017年2月11日閲覧)  
 片野智子 (2015). 安部公房『箱男』論——匿名化された監視を超えて——, 学習院大学大学院日本語日本文化, 11, 42-56.  
 加藤奈奈子 (2005). 体験と記録——<私>を描くということ——, 2004年度京都大学大学院教育学研究科修士論文, 未公開.  
 加藤由紀 (2016). 既読無視と未読無視: LINEの既読表示機能に関する基礎調査. 相模女子大学メディア情報研究, 2, 17-32.  
 河合隼雄 (2004). 2003年度第2回日本箱庭療法学会研修会全体会講演「箱庭療法における地・水・火・風」, 箱庭療法学研究, 16 (2), 77-99.  
 河合俊雄 (2013). 中間対象としてのイメージ. 河合俊雄 (編著). ユング派心理療法. ミネルヴァ書房, pp.38-43.  
 木村敏 (2005). 関係としての自己. みすず書房  
 斎藤久美子 (1992). 面接 氏原寛ら (監修.). 心理臨床大事典, 培風館

v) 本論の引用は、新潮文庫第40刷版による。  
 (2002年12月発行)

vi) 本論の引用は、新潮文庫初版による。  
 (2015年9月発行)

- 坂田利康 (2016). インスタグラム・マーケティング戦略——ユーザーのエンゲージマネジメント獲得に向けた広告コミュニケーション——, 高千穂論叢, 51 (2), 1-33.
- 総務省 (2016). 平成 27 年版情報通信白書.  
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc242220.html>  
(2017 年 2 月 11 日閲覧).
- 田中康裕 (2013). 現代におけるユビキタスな自己意識——サイコロジカル・インフラの消失と発達障害. 河合俊雄・田中康裕 (編著). 大人の発達障害の見立てと心理療法. 創元社, pp.202-217.
-